

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

読み手が共通の認識を得るための情報とその表現
—小説のタイトルと帯から読み手が取得する情報—

加藤 祥, 浅原 正幸

重要情報の提示があれば、どの読み手も同じ内容を認識可能なのか。読み手の認識が概ね共通となるためには、提供すべき情報量とその表現はどうあるべきか。

書籍のタイトルと帯は、読み手の目につくよう内容を提示するものと考えられる。そこで本発表は、小説のタイトルと帯情報から複数の読み手が取得する情報の異同を調査し、読み手の共通認識が得られる要約文として提供すべき情報量と表現について考察する。

調査結果から、当該物語の特徴と考えられる情報が適切に提示される場合、読み手は類似の認識を行うことがわかった。たとえば登場人物情報であれば、人称や役割語（助動詞・終助詞）、職業名などを明らかにするほか、一般的に連想が可能となる上位下位カテゴリ、比喻表現などを用いることで、読み手に共通の認識を伝達できる可能性が確認された。

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

英語母語話者達のトラブルトーク内で発話される否定文発話に対する聞き手の態度を表すyeah・yes・no応答

鹿野 浩子

英語学習は、否定文発話に対して聞き手が肯定を表わすならば"no"を使用し、否定であれば"yes"を使用すると授業で教わってきた。しかし、自然発話で否定文発話に対し肯定を表わすとしても"no"を用いるとは限らなく、"yes"や口語体の"yeah"も使用される。個人や家族・社会の不幸な出来事や嫌な事件を背景としたトラブルトーク内で発話される否定文発話に対する聞き手のyeah, yesとnoの違いに着目し、英文法から逸脱した二者間の相互行為における否定文発話に対する聞き手の応答の違いを明らかにした。分析の結果、否定文発話に対し、聞き手が"yeah"を使用してもそれは聞き手の不同意を表わすものではなく、単に発話への承認をしめしているものであった。また、"no"を使用すれば、それは否定文発話に対する聞き手の連帯の態度が"no"に含まれていた。最後に"yes"を使用されれば、それは聞き手の否定文発話に対する明らかなる不同意を表わしているものであった。

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

Character Language in Mandarin Chinese : A Case Study of Final Particle Ma ‘嘛’

張 祖寧

This paper investigates character language in Mandarin Chinese with a specific focus on the final particle Ma ‘嘛’, from a functional discourse analysis approach. Character language, i.e., a speech style but flexibly changeable according to situations by a speaker, is proposed as an indicator of indexing the features of the speaker (Sadanobu, 2006). It has been argued that Japanese is abundant in character language, while Chinese relatively lacks such marking system. To probe into this issue, along with Chang’s (2017) finding, this paper continues to investigate a third final particle Ma ‘嘛’ in the hope of clarifying the real language use in Chinese. The data will be further discussed from aspects of gender and age. The results show that there is a gender difference. To conclude briefly, this paper examines Chinese final particle use of Ma ‘嘛’ which is often overlooked by linguists but is vital in our daily conversation.

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

中華人民共和国上海市における上海語テレビ放送をめぐる政策

小田 格

本報告の目的は、中華人民共和国上海市の上海語テレビ放送をめぐる政策の実態を明らかにすることにある。従前、同市は中国を代表する都市として、標準中国語の普及政策の面でも一貫して模範的な態度を示してきたが、これは放送領域も例外ではなく、1980年代以降、テレビ・ラジオでの上海語の使用は規制されてきた。各種の施策が徹底された結果、最近の同市の言語政策関連の政策文書では、既に市内の標準中国語の普及率は高い水準にあると判断されており、かかる前提の下、「多言語・多方言」社会の実現に向けた内容も見られるようになってきたが、諸状況に鑑みるならば、上海語テレビ放送が拡大していく見通しは必ずしも明るいものではない。ただし、新時代の言語政策に取り組み始めた同市にあっては、今後の状況の変化に繋がるような施策がなされる可能性も十分指摘されるところであり、その動向には引き続き注視していく必要がある。

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

『日本語・ウクライナ語社会言語学辞典』の編纂：作成と記述方法
—「言語政策」のターミノロジカル・フィールド—

Yuliya Dzyabko

本発表では、『日本語・ウクライナ語社会言語学辞典. 「言語政策」のターミノロジカル・フィールド』の作成過程, 辞典構造や記述方法について検討する. 各分野のターミノロジーの概念はお互いに関係を保ちながら一つの体系を形作っている. 従って, 『日本語・ウクライナ語社会言語学辞典』を編纂するために, それぞれの言語において社会言語学的概念を記述する用語を体系化する必要がある. そのための最初の段階として「言語政策」という概念を中心に構造的分析を行った. フィールド・アプローチを用いて, 各語内の用語の構成や関係を設定し, 「言語政策」のターミノロジカル・フィールドの意味的構造を形成した. 形成した各フィールドの要素や概念関係を対照分析し, 日本語・ウクライナ語の相当する用語を選定した. その結果, 日本語の社会言語学用語を247語収録した日本語・ウクライナ語対訳辞典を編纂することができた.

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

会話データ分析の初学者による話題区分の特徴の分析
—分析手法の指導に向けて—

大場 美和子, 中井 陽子

本研究の目的は、会話データ分析の初学者による話題区分の特徴を明らかにし、初学者に対する会話データ分析の指導の方法を提案することである。調査では、学部生40名（日本語母語話者、3・4年生）を対象に、10分程度の初対面二者会話（女子学生、日本語母語話者）の映像を視聴して話題を区分し、話題タイトルならびに区分に関するコメントを求めた。そして、話題区分の一致率、話題区分の一致率の高低別の特徴（言語的・非言語的特徴、話題に関する情報の新規性）、話題区分に関するコメントを分析した。この結果、学部生の話題区分には内容のまとまりの捉え方の大きさに差が生じて区分の一致率にばらつきが出たが、学部生が指摘した話題区分の特徴は先行研究で明らかにされている内容と類似していた。以上より、指導の際は、研究の目的に合わせて自身の認定基準を設け、それを根拠として他者に明確に説明できる力を育成する必要があると考える。

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

青海省黄南チベット自治州尖扎県康楊鎮楊家上庄村の老楊家語に関する考察
—楊家上庄村B氏との対談を中心に—

周 楊措

中国青海省の黄南蔵族自治州康楊鎮楊家上庄村は、多民族・多言語のチベット族村落である。かつてはほとんどの村人にとっては「老楊家語」と呼ばれる言語が村の共通語であった。この言語は漢語を基礎にしているが、なおチベット語の影響を強く受け、漢語名詞の前に同じ意味のチベット語を置くなど、いくつかの特徴をもっている。

「老楊家語」は、同村が1950年代末、人民公社のもと漢族・チベット族・回族など周辺村落と同じ生産隊・生産大隊に組織されたのち、共同労働の中で1970年代にはほとんど失われた。それに代わり漢語青海方言とほとんど変わらない「新楊家語」か、チベット語アムド方言が新しい世代の母語として登場した。

本発表は、楊家上庄村で生まれ育ったB氏（72歳 男）からの聞き取りによって、近隣村落から「gender guの言葉」と呼ばれた「老楊家語」の収集と分析を試みたものである。

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

ドイツ語統合コースの現状
—大量難民受け入れ以降の状況を中心に—

平高 史也, 荒木 萌

本発表は、近年のドイツにおける大量難民受け入れ以後の統合コースに関する現地調査の報告である。統合コースとはドイツで移民難民に対して国が行っているドイツ語コースを指し、2015年、16年の参加者の多くは中東出身のアラビア語母語話者の若い男性で、国籍や年齢層が従来とは異なっている。難民の多くはドイツでの就労のためにドイツ語の習得を目指しているため、統合コースの需要が高まった。しかし、難民の学歴がさまざまなため、参加者のニーズに合わせたコースが必要とされている。そこで、ドイツ連邦移民難民局（BAMF）は制度を改革し、新たなコースを設けるなどの対応を行っている。しかし、難民の国籍によって庇護申請中の統合コース受講資格に差が生じたり、コースの需要が増えたことで教師が不足するなど課題も少なくない。本発表では、難民や移民が今後ドイツ社会で生活していくためのBAMFの政策や統合コースの有効性を論じる。

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

パプアニューギニアにおけるトクピシンの社会言語学的位置づけ

森 一平, 大岩 和人, 野瀬 昌彦

ニューギニア島の東部分と周辺の島々から成るパプアニューギニアは、800もの言語が話される言語的多様性が豊かな地域である。これらの言語は、単なる系統の差ではなく、語彙レベル、文法レベル共に、相互に理解不可能な関係にある。このような多言語な状況に対して、現地ではある問題が生じている。それは、自分自身の言語（Tokples：「村の言語」）とは異なる言語の話者と意思疎通を図ろうとする際に、自身の言語が通じないことである。

本発表では、トクピシンが現在どのような状況において用いられているかについて、パプアニューギニアのマダン州での調査で明らかとなった事実を分析し、現地語とトクピシンの関係を社会言語学的観点から考察する。

今回の調査結果から、マダン州においてトクピシンは町での共通語として機能し、他言語の話者との意思疎通において、現地語よりも優位な社会的威信を持つということが考察できる。

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

行為促進型表現におけるポライトネス・ストラテジーの中日仏語対照研究
—公共掲示物における社会規範の表示方策を中心に—

谷 智子, 岸本 聖子, 王 蓓淳

本研究では、実際に公共の場に掲示されている、人々に特定の行為を指示する指示文を分析データとして収集し、日本語、中国語（台湾・中国）、フランス語の比較を行い、それぞれの指示文にどのような社会や文化的特徴が反映されているかをポライトネスの観点から考察する。分析の結果、日本語・中国語においては「集団意識」が前面に出されており、フランス語においては「個人」が強調されていることが分かった。「集団意識」が前面に出される日本語・中国語（台湾・中国）であるが、言語や地域によって、その表出のされ方は異なり、文化的社会的な背景が大きく影響しているということが分かった。そのような社会・文化的背景の影響を含め、特に特定の文化におけるフェイス概念に焦点化して詳察していく。

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

日本人の英語に対する認識と現在の英語教育から導き出す日本における言語政策についての考察

五十嵐 優子

本稿は、日本人の英語に対する認識と日本での英語教育を分析し、そこから言語政策の実施状況を考察することを目的としている。筆者は日本人の英語に対する認識と英語変種の存在の認識を調査するため、2015年に日本人大学生を対象にアンケート調査を実施し、その結果、多くの被験者がアメリカ英語が世界中で最も話されている英語であると認識し、学校で教えるべき英語は標準英語だと考えているが、英語に変種があることを知っている学生の数はいずれもあまり多くないことが示された。また日本の英語教育に関する分析としては、第二次世界大戦後の英語教育でのアメリカ英語使用状況と2009年に採択されたグローバル30を検証し、そこから政府の英語に対する態度を考察していく。これらから、本稿では、日本でどのような言語政策が実施され、その根底にある考え方は何なのかを分析し、言語政策は人々の言語に対する認識に影響を及ぼす効果的な方策であることを示す。

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

バイリンガル児童の作詞活動における複数言語の使用について
—Jポップソングの歌詞に散見される複数言語の混用を例に—

オルティス下西 真代

本研究の目的は、日常的に複数の言語に接しているバイリンガルの人々が作詞を行う場合、複数言語の混用を音楽的なストラテジーとして用いるかどうかを明らかにすることである。Jポップソングの歌詞には、日本語と英語が混ぜて使われている例が多くある。これをレトリック、あるいはメロディーやリズムとの調和を考えての音楽的なストラテジーとみるのなら、日常的に複数の言語に接しているバイリンガルの人々は、予め大きなアドバンテージを持っていると言えるのではないだろうか。本発表では、日本在住のインターナショナルスクールに在籍する児童らを対象にデザインした、フリースタイルのラップに挑戦してもらうというテーマの音楽の授業の中での児童らの言語使用について分析・考察する。また、音楽教育の現場において、学習者らに各自の言語レパートリー全ての使用を奨励することが、学習成果の向上につながる可能性があることについても併せて述べる。

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

多言語環境で構築した日本語母語話者の意識構造
—戦時下の中国東北部出身者を事例として—

甲賀 真広

旧満洲国では、日本人は多民族と共生していた。多文化共生社会を生きる我々にとって満洲国の事例は参考にできよう。従来の旧満洲国に関する研究では資料や文献調査による言語形式や言語構造などが研究対象となってきたが、本発表で対象とする意識構造にまでは詳細な分析は行われていない。そこで本発表では、旧満洲国出身の日本人に聞き取り調査を行い、フレーミングとフッティング理論を援用した分析から他民族に対してどのような意識を構築したかを明らかにしていく。

聞き取り調査から明らかになったことは意識構造として共通のフレームを持つことが関係を築くうえで重要であることである。「戦後」に対する似た経験があるフランス人には「ずっと残っていた」とプラスの表現をし、一方でアメリカ人に対しては「すぐに消えた」とマイナスの表現をしている。「戦後」に対する共通のフレームが他民族への意識構造に影響を与えていることが明らかとなった。

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

課題達成対話における談話構造の違い
— 目的を表す「ように」と「so that」を中心に—

谷村 緑, 仲本 康一郎, 吉田 悦子

本稿では「ように」と「so that」を取り上げ、日英語の談話構造の違いを、課題達成対話を用いて明らかにする。データは、日本語話者ペア、英語話者ペア、英語話者と英語学習者ペア各5組が行ったレゴ・ブロックの課題達成対話（計15時間）である。結果、まず日本語の談話構造は〔<Goal> 接続語 <Direction> てください〕、一方英語は〔<Direction> 接続語 <Goal>〕と順序が日英語で反対になっていることが示された。2点目に、英語話者は限られた単純な動詞（例 put, lay, place, move）に、across, between, in the middleのような前置詞を加えて場所を明示するのに対して、日本語話者は、くっつける、重ねる、積む、並べる、はさむ、など多様な動詞で詳細な意味の違いを出すことによってGOALの状態を示していることが明らかになった。3点目に、英語の対面条件では視覚情報の利用により、非対面条件と比べてGOALの出現頻度が顕著に少ないことがわかった。

<<ポスター発表>> (3月11日 09:30-10:45)

【6号館3F 廊下】

日本語対面会話における開始部の構造と特徴
—日常的に・久しぶりに出会った場面において—

岡村 佳奈

本発表では対面会話において日本語母語話者が会話をどのように開始するのか構造を明らかにし、その構造の中から見える特徴を明らかにすることを目的とする。これまで電話会話に関しては、様々な研究によって「呼び出し—応答」→「自己提示—認定」→「挨拶—挨拶」→「挨拶表現—応答」という構造を持つことが指摘されてきたが、対面会話にもその構造が当てはまるのかは疑問である。

本発表では、同性および同年齢の日本語母語話者同士に、「日常的に出会った場面」と「久しぶりに出会った場面」において、どう会話を開始するのかロールプレイを行うよう依頼した。

その結果、対面会話の開始部は、「自己提示・認定—自己提示・認定」→「挨拶—挨拶」→「挨拶表現—応答」という、電話会話と似通った構造からなっていること、隣接ペアの第一部分と第二部分で同一、もしくは類似した発話形式がよく用いられるという特徴があることなどが確認できた。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

緩叙法の機能と役割について

加藤 恵梨

緩叙法とは「いわんとすることの対義的な語句を用い、それを否定することによって、趣旨を表す技法」である。本研究は「悪くない」「良くないわけではない」と、「嫌いじゃない」「好きじゃないわけではない」が用いられている文を分析し、対義語の否定による緩叙法と二重否定の緩叙法の違い、緩叙法の機能、ディスコースにおける緩叙法の役割について明らかにする。二つの緩叙法の違いについては、対義語の否定による緩叙法は、話し手がある事物に対する直感的な印象を述べる際に使われるのに対し、二重否定の緩叙法は慎重に述べる必要がある際に使われる。機能については、対義語の否定による緩叙法は感情的ニュアンスが伴うのに対し、二重否定の緩叙法は強調の機能がある。ディスコースにおける役割については、二重否定の緩叙法はディスコースを前に進めないのに対し、対義語の否定による緩叙法はディスコースを前へ進めるという役割があることを述べる。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

依頼と断りの相互行為における「けど」の言いさし表現
—発話行為連鎖の観点から—

胡 蘇紅, 堀江 薫

話し言葉では、「けど」は主節を伴わず言いさし表現として使われることが多い(白川2009)。永田(2001)は「車販売」の目的指向的談話における言いさしの「けど」が「トピック展開機能」および「相手に談話の進め方を委ねる機能」を有すると主張している。本研究では、目的指向的ではない談話における「けど」の機能を明らかにすべく『BTSJによる日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2011年版』の女性同輩同士の断りの電話会話データを考察した。具体的には、依頼と断りの相互行為談話における言いさしの「けど」の談話機能を分析した結果、以下の2点が明らかになった。(1)「けど」の言いさし表現は永田(2001)が主張している機能のほかに、「意図を婉曲に示す機能」、「意図を相手に推測させる機能」および「話題を転換する機能」を果たしている。(2)「先行連鎖」、「挿入連鎖」、「後続連鎖」の各発話行為連鎖ごとに機能が分化している。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

対訳コーパスを用いた人称詞に関する日タイ語対照研究
—親族名称系対称詞に着目した—考察—

スイリアチャー ロイケオ, 上原 聡

本研究は日本語とタイ語原作の短編小説とその翻訳の対訳コーパスを資料とし、その会話文に出現した対称詞を収集し、両言語における親族名称系対称詞の対応関係を分析したものである。その結果、日本語とタイ語は両言語とも親族名称が対称詞として用いられるが、タイ語の方が出現数が多いこと、つまり、タイ語では親族名称が使用されているが、対応している日本語は、親族名称の他、無形と代名詞にもなっていることなどが分かった。この差異は両言語における対称詞全般の用法と親族名称の用法の違いによるものであり、その背景には「ウチとソト」の概念があると論じた。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

エンパシー提示場面におけるドイツ語付加疑問の機能

木村 英莉子

本発表では、エンパシー提示場面でのドイツ語付加疑問の相互行為的機能について考察する。ドイツ語付加疑問には以下の文例のoderなどが当たる。

Die Katze ist süß, oder?(この猫はかわいい, でしょう?)

ドイツ語付加疑問について体系的に記述した先行研究は少なく、その相互行為的機能は明らかになっていない。発表者は、様々な場面における付加疑問の相互行為的機能を明らかにすることを目標とし、本発表ではその一場面としてエンパシー提示場面の付加疑問について考察する。会話分析を用い、12本の二者会話データ約6時間分を分析したところ、エンパシー提示に際してのドイツ語付加疑問には、「エンパシーの追加として使用される」、「話し手が理解できる、聞き手の状況についての発話に付与される」という特徴があると判明した。この特徴から、付加疑問はエンパシー提示の際に、エンパシーを強める機能があると考えられる。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

ピアノレッスンにおける演奏表現の共同的達成
—相互行為構造の反復に着目して—

山本 敦, 古山 宣洋

演奏運動には個々の身体-楽器関係の制約から一義的正解が存在しうるが、演奏表現の正解は他者との合意に基づくため、社会的な望ましさを有するバリエーションとして存在する。そのため演奏表現の指導においては、指導中に演奏の規範的側面の確認・合意と、演奏の運動的側面の実行を同時に達成する必要がある。この方法を明らかにするため、本研究ではプロの演奏家による音大生に対する1対1の指導場面をビデオカメラで撮影し、相互行為資源の配置に着目して分析した。結果、指導の相互行為において上体運動の同期を軸にした相互行為資源の隣接構造の反復が見出された。生徒・教師の双方向的な模式的同期と、メインの演奏者/同期者を交代した相互行為資源の隣接構造の反復によって、伝達されるべき演奏表現の確認・合意が理解可能になるとともに、演奏運動の達成が物理的側面から支持されていたと考えられる。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

人間と新しい関係性を構築する擬人化エージェントの開発のために
—ポライトネス理論の側面から—

宮本 友樹, 片上 大輔, 重光 由加

本研究の目的は、日本語でポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いる擬人化エージェント（ロボット）の発話を人間（日本語母国語話者）が聞いた時の印象を主観評価する実験の結果を用いて、擬人化エージェントによるポライトネス・ストラテジーの効果を検証するために必要な実験設定を明らかにすることである。ポジティブ・ポライトネス・ストラテジーを用いて発話する女性の外見を持った擬人化エージェントは、男子大学生に対しては、対話相手が機械であるという感覚を下げる効果があった。しかし女子大学生は、対話相手である擬人化エージェントを低く評価した。このことから、実験結果に性別によるバイアスが生じている可能性が考えられる。この課題に関して、人間が擬人化エージェントの振る舞いに対して行う解釈に関する知見に基づき、擬人化エージェントによるポライトネス・ストラテジーの効果を検証するために新たに行う実験について検討する。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

知的障害者とする「わかりやすさ」の特徴
—作成過程に着目して—

打浪（古賀）文子， 岩田 一成

本発表では，知的障害者が日本語による文章のどのような点に難しさやわかりやすさを感じるのかを明らかにすることを目的として，NHKニュースを元記事とした知的障害者向けのわかりやすいニュースを作成し，リライト過程の文章と作成工程における知的障害当事者の意見を分析した。

リライト過程の文章とリライト後の文章を比較すると，名詞数が圧縮されていること，出現頻度が増えた語彙があることが明らかとなった。また，知的障害当事者の意見の分析から，情報の加除それぞれに関する要望に5つの傾向が見いだされた。

知的障害者にとってのわかりやすさは，文章や段落，記事全体の分量や談話レベルを見通したリライトに拠っていること，リライト時の文章の圧縮や言いかえに加えて具体例などの「適切な加筆」を行うことによってわかりやすさが創出されることが示唆された。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

日中の国語教育で学習する意見を述べる作文の文章構造に関する一考察
—日本の「意見文」と中国の「議論文」を資料として—

前川 孝子

発表者は、中国人日本語学習者が日本語で文章を書く際の構成や要素に、中国の国語で学習する文章ジャンルである「記叙文」と「議論文」の影響を受けていると考える。本発表では意見を述べる作文である日本の「意見文」と中国の「議論文」の文章構造を樺島(1979, 1988)の分類基準により観察し、それぞれの文章ジャンルにどのような特性があるかを考察することを目的とした。その結果、日本の意見文の構造では、「証明」、「他の意見」や「他の意見」に対する「反論」が構造の要素として観察できた。一方、中国の議論文の構造ではこれらの要素は観察できなかった。しかし、「引用」、「問題提起」、「要求」が各作文に要素として必ず存在していた。これらの結果は、両者の定義にも符合する。仮に中国の「議論文」に特徴的な要素を用い日本の「意見文」を書いた場合、日本で教育を受けた日本語教師にとっては、違和感を覚える文章となることが予想される。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

やさしい日本語ニュースにおけるニュースジャンル間の高頻度語彙の重なり程度

近藤 めぐみ

本研究の目的は、やさしい日本語ニュースの、ニュース全体及びジャンル別の高頻度語から、ジャンル別語彙の重なり程度を明らかにすることである。資料は、2016年6月から2017年3月までの10か月間のNHK NEWS WEB EASY, 962本で、〈国際〉〈社会〉〈科学・文化〉〈ビジネス〉〈暮らし〉〈スポーツ〉〈気象・災害〉〈政治〉, 9つのジャンルがある。

本発表では各ジャンルで使用された実質語の3分の1強をカバーする上位30語を高頻度語とする。ニュース全体での上位30語によるカバー率は約35%, 各ジャンルのカバー率は41~34%である。ニュース全体と各ジャンル語彙では93~70%の語が共通し、〈社会〉, 〈暮らし〉と〈科学文化〉, 〈国際〉, 〈ビジネス〉と〈気象・災害〉, 〈スポーツ〉と〈政治〉の順に語彙の重なりが大きかった。ジャンル間では、〈社会〉と〈暮らし〉の重なりが大きく87%で、〈スポーツ〉と〈ビジネス〉では最も小さく、50%だった。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

日韓小学校国語教科書から見た作文教育
—より良い日本語作文教育に向けて—

鄭 潤静

日本語教育において、教科書を分析対象とする研究は多数あるが、それは殆ど高等学校の日本語教科書に限られており、作文に焦点を当てて、日韓の国語教科書を分析した研究は、管見の限り見当たらない。本発表では、日韓小学校国語教科書を用い、作文に焦点を当てて、作文教育の特徴を見出し、日本語作文教育に還元できる提案を試みることを目的とする。

本研究から、韓国の小学校では、文章の骨組みともいえる文章構造を早い段階から学習させていることが分かった。これは日本語作文を書く際にも役立つものである。学習者が既に「段落」と「中心文」を学んでいたということは、日本語作文を指導する際に、重要な意味合いを持つと考えられる。

母語で学んだ「段落の構造」や「中心文」など作文における形式的な要求条件を想起させ、日本語作文を書く際にもそれらが適用できるということを学習者に指導することが望ましいと考えられる。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

会話における演技による参与枠組の組み替え

臼田 泰如

本研究では、演技というタイプの発話・行為がなされるとき、会話の場の参与枠組がなんらかの変容を被るのではないか、という仮説の検証を試みる。ここでいう演技とは、ある発話者のその時点での発話としてではなく、かつて誰か他の人や過去の発話者自身が発したことばやふるまいを再現してみせることや、場合によっては実際になされてはいない発話や行為をやってみせることを指している。本研究で用いるデータは、インフォーマルな友人同士のグループが集まってゲームをしている場면을継続的にビデオカメラで収録したものである。こうしたデータを使用し、会話分析の手法を用いて、ある発話や行為がその前後の発話や行為とどのような関係にあり、それらの発話を通じて達成された行為は何かを記述することを通じて、演技に関連する形で、参与枠組になんらかの変化が生じているのかどうかを明らかにする。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

話し合い会話の日中対照研究
—発話タイプの出現頻度の比較を通して—

宮永 愛子

本研究は、日本語と中国語の話し合い会話を比較し、両言語にどのような共通点や相違点があるのかを探るものである。分析対象としたのは、日本語と中国語のロールプレイによる話し合い40会話である。そこに出現した発話を、意味機能に従って分類し、それらの発話タイプの出現数と、出現パターンを比較した。その結果、中国語では、両者が交互に自身の意見を主張するという談話パターンが多いのに対して、日本語では、両者が同じ立場になって、それぞれの交通手段のメリット、デメリットについて検討してくという談話のパターンが多いということが分かった。また、会話の終結部分に焦点を当てて、比較したところ、日本語では、「繰り返し」の頻度が高く、合意形成がされてからも、「主張」や「相手側のサポート」が頻出しているという特徴が見られた。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

応用言語学と生命科学論文の抄録中に見られるinteractional metadiscourse, self mentionsの通時的
分析

福池 深月

近年、学術論文においてweやourなどの人称代名詞を使用した文章が分野を問わず多く見られる。Hyland(2005)の分類によると、人称代名詞はmetadiscourseの中でも“interactional metadiscourse markers”の“self mentions”に含まれる。本研究では論文の抄録3, 200編を対象に、過去30年間におけるself mentionsマーカー (we, our, us) の使用頻度を2つの学術分野(応用言語学と生命科学)で比較し、生命科学の方がweの使用頻度が高いこと、両方の学術分野において近年weの使用頻度が増加していることを明らかにした。本研究の結果から、生命科学分野では人称代名詞の使用が文体として受け入れられる傾向にあり、生命科学分野においてその傾向が強いと考察できる。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

漫談における仮想的対話の導入
—独話の相互行為性の解明に向けて—

岡本 雅史, 津田 明日香

本研究は、一人の演者が観客に語りかけ笑わせるスタンダップコメディの一種である「漫談」を取り上げ、そこで演者が導入する仮想的な対話場面の言語的分析を通じて、独話における相互行為性とはいかなるものであるかを考察する。特に、漫談のなかに対話場面を導入する手法としての引用標識に着目し、引用標識の脱落がオチへのクライマックスを準備する緊張感を醸成することを明らかにすることで、従来は漫才のような二者間の対話形式にのみ適用されていたオープンコミュニケーション概念が、独話においても仮想的な対話の導入と場の外部の観客への提示という多層的な構造を適切に説明することが可能であることを示す。

<<ポスター発表>> (3月11日 10:45-12:00)

【6号館3F 廊下】

メキシコ日系移民の日本語にみられるスペイン語の影響

奥村 晶子

本発表はメキシコの日系コミュニティで使われる日本語の特徴を、メキシコスペイン語（以下スペイン語とする）からの影響に焦点を当てて分析を試みるものである。今回はメキシコ生まれ育ちでの日系移民二世と三世に焦点を当てて、自然発話の中に現れるスペイン語からの転移を分析する。分析対象とする転移の現象は以下のとおりある。a) スペイン語の機能語の使用、b) スペイン語の音素への置き換え、c) 長母音と短母音の融合。また、以上の言語学的現象を、話者たちの社会的属性（移民の時期、日本語学習歴、日常的な日本語の使用の有無など）と関連されて、どのような傾向が見られるのかを分析・考察する。